

【研究ノート】

大学新聞『大東文化』の囲み記事 「母校の半世紀」（1972～1975年）

谷本 宗生

はじめに 囲み記事「母校の半世紀」の位置付け

1973（昭和48）年10月、本学創立50周年記念式典が挙行された。会場である板橋キャンパス大講堂には、奥野誠亮文部大臣を始め来賓、同窓会員、父兄会員、教職員、学生代表など総勢2千人が集い、記念式典がとり行われる。式典では、本学の功労者として、岸信介（後援会長）、福田赳夫（副会長）、平島敏夫（元学長）、芳野国雄（郵政会長）が感謝表彰を受けている。第4代学長の佐伯梅友も、本学創立50周年にあたり「五十周年を迎えたということは祝賀すべきことに違いない、特に、本学の場合は、そう思われる。…それにしても、戦火に焼けただけでなく、純然たる私立学校になった後の十五年ばかりは、どんなにしてももちこたえて来たのであったろうか。ほんとうに大変なことだったろうと思われる。…とにかく、これを潰してはと、歯をくいしばってもちこたえて来てくださった方々のことを、まず思わなければと思うのである。板橋の地をトとしての新しい出発が決断・実行されたのも、そうした苦しい時期があったればこそ、ということになるだろう。その後の当事者の労苦、それは一般に目に見えないが、それと、教職員・学生・父兄・卒業生の協力があって、今日の状態が得られた、ということになる。だからといって、これをただ祝えばよいものではないだろう。われわれは、われわれの大学をいっそうすばらしいものに成しあげるべく、努力しなければなるまい」と誓っているのである¹。

大東文化学園の機関紙である大学新聞『大東文化』に、1972年2月から1975年4月まで掲載された連載企画「母校の半世紀」は、内容分類上大きくみて、2部の構成になっている。題字「母校の半世紀」は、

青山杉雨（1912～1993年）教授の筆による。第1部は同窓関係者「語る人」からのインタビュー記事（1）～（16）で、第2部は『大東文化大学五十年史』（1973年）の摘録（1）～（完）で構成されている。なお本稿で用いる大学新聞『大東文化』については縮刷版化されており、板橋及び東松山校舎の大学図書館にて閲覧利用することができる（請求記号 PD/071/D28）。

第1部「母校の半世紀（1）」の冒頭²で、本学創立50周年を意識して、「関東大震災の直後に創設された母校は、時に経済的危機に見舞われ、やがて戦禍に追われ、学制改革の波をのりこえて、来[1973]年九月には創立五十周年を迎えようとしている」と述べている。そして、「広大な現校舎を望見する卒業生の感慨はまた新たなるものがある。九段校舎に始まる折り折りの思い出のいくつかを、年代を追って同窓諸氏に伺っていくこと」として、連載企画「母校の半世紀」の第1部「語る人」が開始される。

いっぽう第2部「母校の半世紀（1）」の冒頭³で、「本学五十年史は…石塚[謙三]編集幹事の手記にみられるように、長い年月の間に散逸していた資料や、誤りのない実相を苦心して収集、編纂したものだけに、われわれが一読目を開かれる思いがする項目が多い」と述べ、連載企画「母校の半世紀」の第2部『大東文化大学五十年史』の摘録が開始される。『大東文化大学五十年史』の石塚編集幹事は、同上号にて「五十年史あとがき⁴」として「資料は皆無といった状態で何から手をつけてよいやら全く暗中模索ともいふべきものであった。…とにかくこの度の編史事業は資料を掘り出すことから始めたものであり、既存資料をまとめたものではなかった。従って繁簡宜しきを得ず、年誌の体を得ない点のあることも編集者自身認めている次第である」と、編集後記を記しているのである。

以下、本稿では大学新聞『大東文化』で連載企画として取り上げられた、囲み記事「母校の半世紀」（第1部・第2部）について、1973年の

創立 50 周年までの本学の歴史にかかわる、とくに貴重な関係資料や史実と思われる記事を重点的に解説紹介してみたいと思う。今回言及しない記事については、目次立て（書誌情報）のみを記すこととする（なお〔 〕は、筆者（谷本）が適宜付すものである）。

1. 第 1 部 囲み記事「母校の半世紀」

母校の半世紀（1）語る人：影山誠一（本科 1 期卒） 初期の九段時代
ほとんどが給費生 伊勢参りにエンビ服も

（1972 年 2 月 1 日、第 236 号 1 面）

本学の文学部長を務めた影山誠一は、本科 1 期生である。影山の証言によれば、千葉師範学校を卒業して千葉県の小学校教員（訓導）を務めていたころ、新聞で新たに漢文の専門学校ができて生徒募集を行うという記事が出て、それをみて受験したという。小学校教員を辞めてまで大東文化学院を受験しようとした動機について、「気に入ったのは何より給費制度でした。本科生は月額二十五円－三十五円、高等科生は五十円－八十円を支給し、教科書もタダというのですから」と、影山は率直に述べている。

高等科 1 期生の西脇玉峰も、新設される大東文化学院の 1 期生募集広告をみて、「当時五十三歳であつた老学究の私の胸は何となく躍った」とし、なにより「しかも月六十年也の学費を給与するとしてある」と、喜んで学院に入学したという。しかし在学してから、「ロージャの哲学史や、教育学を原書でやることになつたので、私〔西脇〕は大に面喰つた。三十年ぶりで英語をやり直すので、非常に苦勞であつた」と告白している⁵。

後に影山も本学教員となり、「漢文講読」（論語）の講義などを学生らに講義するが、当時受講した福田俊昭（大学 15 期卒）によれば「句読点と返り点が施されたテキストで、それを〔影山〕先生が淀みなく訓読、解釈し、それを学生が筆記するのである。そして翌週の講義の冒頭に先

週講義された漢文から数行抜粋し、句読点だけの漢文に返り点・送りがなを付けさせるのである。…前回の講義箇所を全部訓読しなければならなかったので大変であった。しかし私[福田]が今日あるのはこの小テストの御陰であると感謝している」という、自身も学院1期生であった影山の母校教師となつての授業ぶりである⁶。

母校の半世紀(2) 語る人：神立時三郎(本科6期卒)・石塚謙三(本科6期、高等科9期卒) 中期の九段時代 大陸志向が昂まる的確だった大津総長の一言 (1972年4月1日、第237号1面)

神立時三郎と石塚謙三の弁では、学院総長の大津淳一郎が苦心しながらも、在学生組織としての大東文化学院同学会を発展改称して、大東文化学院志道会を組織したとする。志道会は小柳司氣太が論語から選んだ名称で、大津学院総長を会長とし、小柳が副会長を務め、庶務部、研究部、雑誌部、弁論部、剣道部、弓道部、旅行部、柔道部を置いた。1931(昭和6)年6月には、亜細亜部も置かれる。石塚によれば、この亜細亜部の設置が「昭和十三年の学制改革のさいの東亜政経科は、学生の組織であるこの亜細亜部が母体になった」と捉えている。神立によれば、「学生の大陸熱は、旅順工大から大東の教務主任にきた内堀維文教授とか、満州帰りの豪傑で支那[ママ]語の田中逸平講師の感化、満州国[ママ]官吏育成の大同学院教務主任鳥飼健(本4[高等7]、剣道部主将)、同学院一期生の高辻長吉(本5、柔道部主将)ら先輩の影響が大きかった」とみている。大東文化学院卒業生が大陸へ渡る確かな方法について、「大同学院へ入るか外務省[文化事業部]の留学生になるかのいずれかでしてね。留学生は年に二、三人しか採用しないのに、中にいつも大東の卒業生が入っていました。日華学会会長代理をしていた内堀教授の推挽があったのでしょ」と指摘している。内堀維文教授の人となりについて、外務省の第1回北京派遣留学生にも選ばれた法本義弘(本科4期)は、「誰も彼も、先生にならどんな事を相談しても、持ちかけてもいいといふ絶

対の信頼を置く様になつて居つた…学生は誰も彼も、先生を慕つた。土曜・日曜には、先生の大久保邸はさうした学生の群で一杯になつた。其の中に、先生が大東文化学院を世界の大東文化に、少なくとも印度以東の大東文化たらしめようとの抱負を持つていられることが、みんなに判つて来た。…『青年には不平がある、その不平は誰かが一応は聞いてやらねばならぬ。然るに今の学校教育は、殊に専門以上の学校では、それを聞いてやる先生が居ないのだ』先生は、よくそんな風に仰つた。密かに推察するに、先生は学生に対する限り、よき話し手たらむよりは、寧ろよき聞き手であろうとして居られたものの如くである」と述べている⁷。学院の教務主任も務めた内堀教授は、学院生らの訪問に自宅を快く開放するなどした学生生徒思いの教育者であつたといえよう。

母校の半世紀（3） 語る人：神立時三郎・石塚謙三 中期の九段時代 異色、漢詩の校歌 大漢和辞典の編纂にも協力

（1972年5月1日、第238号1面）

母校の半世紀（4） 語る人：森本栄（本科10期卒） 中期の九段時代 二・二六で試験流れる蓑田演説を中止させた加藤総長

（1972年6月1日、第239号3面）

母校の半世紀（5） 語る人：坂本政親（本科14期卒） 後期の九段時代 “非常時”へ徹夜討論 ボロ校舎にも気概と自負持つて

（1972年7月1日、第240号1面）

母校の半世紀（6） 語る人：藤村通（本科15期卒） 後期の九段時代 「東亜政経科」を新設 遂に国家総動員法が公布される

（1972年9月1日、第242号1面）

同上記事では、「<…戦時態勢強化の国家総動員法が公布されたのが昭和十三年四月一日ですが、藤村[通]先生はちょうどこのころの入学です> …挙国一致の氣勢をあげていました。学院も時局に沿って学制を改めて本科を三部制にしました。従来通り漢学を主体とする第一部(修

身漢文科)と第二部(国語漢文科)に加えて、大陸経営の要員を養成する第三部(東亜政経科)を設けました。私は神田の通りで新学制による学生募集のポスターをみて、大陸へ雄飛できるならと、さっそく政経科へ応募しました。…新設を推進したのは大東文化協会の山本悌二郎会頭で、山本さんは協会研究部の藤沢親雄さんや斉藤响さんをブレーンにしていたのですが、そもそも山本さんをその気にさせたのは、報知新聞(当時は一般紙)記者をしていたOBの寺島隆太郎さん(本科7)のようです。『銃と剣の時期はもう過ぎた。次は人とペンの力で大陸を治めなくては…』と山本さんを説いたのでしょうか。寺島さんは小柄な体躯ながら弁舌の立つ人で、後に郷里の千葉県から代議士に当選して国会の名物男になりましたが、惜しいことに早く亡くなりました。…<政経科の性格が大東の伝統とは異質だということで、ほかの部の学生たちと融け合わないというようなことはなかったでしょうか> 同期生間では仲良くやっていましたが、上級生、ことに高等科生の中には『余計なものが入ってきた』という雰囲気がありました。従来の教授の多くが政経科を白い目で見えていましたので、上級生たちも先生方の影響をうけたのでしょうか。…政治、経済は主に東京商大(今の一橋大)の先生がきてくれ、中山伊知郎博士からも教わりました。そのころから今日まで大東の教壇に立っている先生に国松久弥先生(経済学部)がいます。そんな状況の中で政経科は定員が五十人から百人、百五十人と年ごとにふくれ上って、私たちが三年になったときは他の二部と高等科を合せたよりも多くなりました。“ままっ子”が育ちすぎたために学院当局に波風が立ち、八カ国語に通じていた藤沢親雄教授はローマ大使館の参事官になるといって学院をやめ斉藤响教授も教壇を去るハメに追込まれました。斉藤さんについては、政経の学生が留任運動を展開しましたが及びませんでした。それでも大陸の状況はますます政経科の存在を大きくして、私たちが卒業したあと、一年終了の興亜専修科を増設しなければ時局の要請に追いつけないほどでした。こうした当時の是非論議の当否はそれとして、大東が

総合大学としての歩を進めている今から顧ると、この東亜政経科が今日の大東の一つの土台になっていたことは確かだと思います」と記されている。さらに同記事には、「<政経科の学生は、それだけ時局の緊迫を身近に感じていたと思いますが、その辺のところはどうでしたか> …昭和十五年には紀元二千六百年の式典がおこなわれ、翌十六年の大東亜戦争宣戦への道をひた走りに走っていたわけですが、当時はそれほど切迫した感じはうけませんでした。まだまだ学生生活にゆとりがあったせいでしょう。それでも、町のネオンサインはやがて見るができなくなるだろうとの配慮から、卒業アルバムの一頁をネオンサインのモニタージュで埋めたことを覚えております。池袋の新校舎が十六年春にほとんどでき上り、私たちは卒業式だけ新校舎でおこないました。十七年にわたる九段校舎時代が終って、いよいよ第一次池袋校舎時代に移るわけです」と、インタビューを受けた本科15期卒の藤村通は、学院の當時を振り返って率直に述べている。

とくに藤村も挙げている、時局の要請を受けて本学でも増設されたという「興亜専修科」については、いまだその実態など詳しく明らかにされていない。『大東文化大学五十年史』（1973年）の巻末年表欄に、「昭和十九[年] 興亜専修科設置（設置月日は不詳、一年で閉鎖）」と記されている程度である。ただし当時の新聞をみると、「大東文化学院に興亜科 支那[ママ]満蒙進出者養成を目的とする大東文化学院（豊島区池袋三丁目）ではこんど新たに専修興亜科（修業一年）を開設した、入学資格は中等学校四年修了以上で、試験日は[昭和十九年]四月二十三日⁸」、「[広告欄]大東文化学院専門学校 募集人員 {本科第一部皇学漢文科四十名・第二部国語漢文科四十名・第三部東亜政経科六十名・専修興亜科百名} ▲出願期日 自[昭和二十年]二月八日 至二月二十日 詳細ハ要郵券六銭貼附宛先記入封筒[同封請求ノ事]⁹」などと公表されている。実際に興亜専修科に入った生徒らの足跡について、管見の限りでは「[昭和十九年]七月十三日 農繁期における学徒動員は、本学院に

於ては千葉県印旛郡本埜村農会と吉植農場へ行くことになった。既に専修科生は該農場に八日より十日間の予定で出動中である。これは本科生と交代したのである¹⁰、「私[梅原孝治]は、昭和二十年大東亜戦激化の折、当時池袋にあった本学院に受験入学致しました。当時は専修科という科があり、その科に在学したのですが、すぐ千葉県大綱に学徒動員され、貯水池建設に駆り出され、トロッコ押しの土方に使役され、ある時は米空軍の銃撃を受け、逃げ回ったこともありました。[昭和二十年]八月十五日、聖断が下り終戦、帰省したのですが、東京一面は焼野が原。…本部が酒井総長邸に移転し、総長邸を借りて授業再開との連絡を受け、早速国電高田馬場駅に下車し総長邸へと向かった。私達専修科は、八坪ばかりの一戸建の洋風の応接間を与えられ、中二階の方は高等科の方々が授業を受けられたようです。当時専修科は生徒数四十名ぐらいで、机椅子などはなく床に腰を下して授業を受け、教科書といえば本らしきものもなく、教授の指示を受け、神田の古本屋をあさって見つけて来る次第でした。担任は山本正一先生と記憶しております。教授の陣容は、中国語は山本・奈良・吉原先生、国漢は笠井・中沢先生、中国史は七里先生、法律は望月先生だった¹¹、「[昭和二十年]十一月十四日 三部及び専修科遠足のため休講¹²」と知り得るだけである。

母校の半世紀（7） 語る人：森井俊彦（本科18期卒） 一次池袋時代 卒業式も半年繰上げ そば屋で飲み警官に捕まる

（1972年10月1日、第243号1面）

母校の半世紀（8） 語る人：河上昇之助（本科20期卒） 一次池袋時代 空襲で校舎が炎上 酒井総長邸で寺小屋授業

（1972年11月1日、第244号3面）

母校の半世紀（9） 語る人：井上博二（本科23期卒） 青戸時代 信号灯の下の読書 困窮の中で人間的ふれ合い

（1973年1月1日、第245号3面）

同上記事で、冒頭インタビューによる「昭和二十一年から、再び池袋校舎へ戻った[昭和]二十四年までの青戸[青砥]時代は、戦後の混迷と困窮の時期で社会的事件が相次いで起り、人心も荒みきって、行くすえどうなるかわからないありさまでしたが」という問いかけを受け、当時在學生であった井上博二（本科23期卒）によれば、「私は二十年九月に復員し…もういちど学問したいという気持から翌年四月に大東の本科一部（当時は東洋哲学科とも呼んでいました）入学し、移ったばかりの青戸校舎の寮へ入りました。校舎は中川の堤防のそばにあった軍需工場の建物にちょっと手を加えただけのもので、作業場跡は大教室、食堂、図書館に、二棟の工具寮は階下を普通教室、二階を学生の寮にあててありました。…校門を入れて右側の塀に沿って、九段校舎ゆかりの青桐がそこにも数本茂っていたのは奇縁でした。志道寮と名付けた学生寮は二十畳間が南寮と北寮にそれぞれ四室づつ合計八室あって、一室に十人前後の寮生が入っていました。全校で四百人ほどでしたから、二割位の学生が寮に泊っていたわけです。舎監の吉村五郎先生（本7・現外国語部長）をはじめ中沢希男（現講師）、笠井輝男（高10・同[現講師]）、波多野太郎（高9）、藤村通（本15・現講師）など若手の先生方もご家族と、あるいはひとりで別棟の宿舎に寝泊りしておられました。後に総長になられた当時の協会理事長の土屋久泰先生もおひとりで千駄ヶ谷の宿舎から越してこられ、また用務員の磯[ヶ]谷のおじさんおばさん夫婦も住んでいて、校内は大東大家族の観を呈していました」と述べている。敗戦下の物質的困窮が激しいため、「学資かせぎのためのアルバイトが流行し、志道寮からも紙芝居やピーナッツ売り、進駐軍労務に出かける人がふえました。寮は寝るだけで昼間はアルバイトにかかりきりという専門家も現われ」るなかでも、当時の学院では「東洋哲学の原富男先生は白文派のきびしい方で、学生が返り点や送りがなのついた国字解本などを使っていたりすると、大東生たるものがそんな本を使っているのは困るではないか、とっておしかりにな」るほど、「学生同士、学生と教師が

年齢、思想、信条、学問を越えてお互いにいたわり合い、学問を研鑽し合い、そこから人間的な触れ合いの尊さと真の学問追求のあり方を見出していった」とする、まさに「精神的には満ち足りた青春の日日」であり、かつ「特異な一時期」でもあったと位置付けられるであろう。

学院の裏方にあたる校務員として、1936（昭和11）年3月～1962（昭和37）年6月までの26年間従事された磯ヶ谷夫妻は、二・二六事件のあった不況のどん底の年に職をなくして困り果てていたが、新聞の広告で大東文化学院が夫婦住込みの用務員を募集しているのを知って応募し、大勢の申込みの中から就職試験を経て採用される。夫は38円、妻は8円の月給だったが、困窮の底でつかんだ職だけにありがたさが身にしみ、「一生をかけて学校のために尽そう」と夫婦で誓い合ったという。夫妻によれば、「池袋へ移ってから東亜政経科の新設で学生の定員がふえ、入学試験も学校の前の小学校を借りてやるほど」となり、その頃学院から夫妻に校内食堂を運営するよう命が出される。とくに青砥時代に、「五十人ほどの寮生の炊事を配給物だけでやれといわれて、これには苦労しました」とし、食料調達で千葉県農家によく買出しに出かけたことを回顧している¹³。

母校の半世紀（10） 語る人：鈴木武夫（大学2期卒） 二次池袋時代
幻の校名“文政大学” 学長交渉で友情の卒業証書

（1973年2月1日、第246号2面）

母校の半世紀（11） 語る人：小松宏吉（大学6期卒） 二次池袋時代
入学の半数が脱落 スクーターで自動車部新設

（1973年4月1日、第247号3面）

戦後の新制大学時代になって、小松宏吉（大学6期卒）は、同上記事で「卒業生名簿をみても[大学]六期生は日文が二十一人、中文が三人、私のいた政治経済も二十九人しか名が出ておりません。政経だけでも五十人近く入学したはずですから、[在籍]途中でずいぶん脱落したわけ

です。…出席が少ないので[結果として]ゼミナール形式の授業が受けられました。私はすでに明大専門部を出ておりました、妻の両親たちと幼稚園を開くについて教員免許状をとる必要があって出直したわけです。…そんなわけで入学したときは二十九歳の世帯持ちで、同級生とはひと回り違う兄貴分でした」と述べている。当時の授業風景の一端について、「学校側も[定期]試験の不合格者には二度でも三度でも追試験をし、できるだけ合格させる方針のようでした。体育というと柔、剣道に卓球くらいのものでしたから、何も[運動]やらない私[小松]は体育の単位をとるのに苦労しました。マンモスのあだ名があった伊能という先生は、ラジオ体操ができれば単位をくれるというので、毎日早く学校へ行って、数人の同級生とラジオ体操を練習してパスしたこともありました」と述べている。小松によれば、「ドイツ語の木下祝夫先生が銀座のクインピーという店のチャリティーパーティーの招待券をくれたので、友人と二人して、胸をときめかせながら出かけたのです。木下先生はいま福岡市内の神社の宮司をしておられるごくまじめな方で、いまでも年賀状をいただいております」という微笑ましいエピソードもあり、新制大学となっても変わらない学生と教員の親密な関係性がうかがえるだろう。さらに、学生のクラブ活動についても、「柔、剣道と空手、それに詩吟、書道などがありました。ちょうどそのころ…自動車会社とコネがあった堀田常任理事からスクーター数台と箱型ダットサンを一台寄付してもらい、免許証を持っていた私[小松]が先に立って自動車部を作りました。自動車部は当時の各大学の花形クラブでした。これが私の二年のときで、部員を募集すると二年生と一年生の大半が申し込んできました。そこで自治会長の鏡光昭君に交渉して三千円か五千円の補助をもらって、まず車庫を造りました。一年生の財田昭弘君に大工の気があったので彼を棟梁にして、部員が寄ってたかって建ててしまいました。初めは校庭の南側でしたが、隣の民家から火事の心配があると苦情が出たので、みんなで担ぎ上げて北側へ移しました。…スクーターは大人気で部外の学生まで乗り

たがるので、これを制止するのに骨を折りました。部員がつてを求めて借りてきた自動車をつらねてドライブもし」たという。1956（昭和31）年4月30日の『大東文化大学新聞』復刊第1号でも、「新誕生の自動車部」という見出し（学生の自治活動紹介）欄で、「我々はもっとよりよき四年間の過し方を見出さねばならない。兎角、毎日の勉強に追われ、無味乾燥な人間になり易い大学教育にもっと技術を身につけ、社会生活上必要な課外活動に従事することである。この要望に合致するものこそ自動車部であると断言する。我々が一步社会に足を踏み入れた時、その生存競争の激化を感知し、社会が一人でも多くの技術者を要請していることに気付くであらう。…我々部員が心から念じている事は生半可な気持でなく真剣に自動車と取組み心から自動車を愛する人間の入部である事を強調して已まない」と記しているのである。

母校の半世紀（12） 語る人：近藤宣治（大学10期卒） 二次池袋時代後期 暗い事件が相次ぐ 学生運動には冷静に対処

（1973年5月1日、第248号3面）

母校の半世紀（13） 語る人：前川邦生（大学14期卒）・三池操（大学19期卒） 板橋・東松山時代 畑の中の“大東砂漠” ゴム長はいて“山の校舎” 通い

（1973年6月1日、第249号1面）

母校の半世紀（14） 語る人：金子昇（本科11期卒） 忘れ得ぬ人々（上） 機略、豪風の大東人 満蒙に散った熱血の先輩達 機略縦横の士（高7） 烏飼健氏 天下の酒豪（高7）小原正章氏 熱血男子の見本（高8）高辻長吉氏 名参事官（本7）菊地三郎氏 一世の豪風（本9）斎藤保氏

（1973年7月1日、第250号1面）

母校の半世紀（15） 語る人：金子昇（本科11期卒） 忘れ得ぬ人々（中） 補助金の減額を撤回 協会の陰の力、政界の人々 熱腸の国士（協会四代会頭）小川平吉氏 厳正の政客（元協会副会頭）木下成太郎氏、ひげの将軍（元首相）林銑十郎氏

（1973年9月1日、第251号1面）

母校の半世紀(16) 語る人:金子昇(本科11期卒) 忘れ得ぬ人々(下)
経営の再建に情熱 切り抜けた池袋時代の窮状 意外な漢学者(元首相)
吉田茂氏 興亜の先覚(学院講師) 田中逸平氏 誠意と情の人(三代理
事長) 尾張真之介氏 (1973年10月1日、第252号1面)

2. 第2部 囲み記事「母校の半世紀」

母校の半世紀(1) 超党派の協力が結実 創立に至るまでの経緯
(1974年2月1日、第255号1面)

母校の半世紀(2) 大東文化学院生誕 黎明期を推進した政界人
(1974年4月1日、第256号5面)

母校の半世紀(3) 花開く志道会各部 天津淳一郎総長を中心に
(1974年5月1日、第257号1面)

母校の半世紀(4) 道義の国実現に挺身 志半ばに仆れた烏飼氏
(1974年6月1日、第258号2面)

母校の半世紀(5) 国破れて学舎なし 非運混迷の終戦前後
(1974年7月1日、第259号1面)

同上記事の内容は、『大東文化大学五十年史』所収の大東文化学院(旧制)時代の、「[池袋]校舎焼失([昭和二十年四月]十三日午後十一時～十四日未明)」「酒井総長邸授業と学生大会」にあたるものである¹⁴。池袋校舎については、「昭和二十年四月十三日夜、米軍による東京大空襲によって校舎焼失、池袋移転以来わずか四年にしてそのすべてを烏有に帰してしまった。東京のほとんどが焦土と化したことであり、やむを得ないことではある」とする。当時の校務員である磯ヶ谷氏も、「[昭和二十年四月十三日]夜十時ころ空襲があり、まず当直の先生が御真影を守って避難し、防空要員として泊りこんでいた学生十数名が重要書類を防空壕に入れて避難した。…翌朝行ってみると、すべてが焼失していた」という。当時の在校生のうち、「本科二、三年在校生の大部分は新前橋

の理研ピストン工場その他、他に、また入学直後の一年生も千葉県大網町その他に分散動員され、学院に残留するものは高等科在學生と本科生の一部のみにあつた。栗原圭介（高等科三年）の日記（四月十六日）には、「目白駅前から学院に通じる道路の辺一帯の下水には、学院の焼失した漢籍の灰（文字の部分が見える）、燃えさしの紙片が折り重なっていた」と生々しく記されている。戦災後、学院の応急教場として酒井総長邸が使用されていたが、酒井総長自身が戦犯容疑の対象となり、学院の再建を願う学生らからも新校舎への移転嘆願（同盟休校）があがり、1946（昭和21）年2月、かつて大日本機械の訓練養成所及び寄宿舎であつた葛飾区青砥校舎に移ることになる。

母校の半世紀（6） 南瓜の花がご馳走 待合室の灯りで勉強

（1974年9月1日、第260号1面）

同上記事では、戦後の青砥時代について卒業生らの貴重な回顧・手記が綴られている。「寮（志道寮）…一棟の二階を大きく区切って使われていた。一室は二十畳ないし四十畳の大部屋で、押入れが上下合わせて八つから十六くらいそれに十人から二十人くらいのもが入っていた。日中は部屋に出入りする学生が多く、落ち着かないので、本を読むときはみな押入れに蒲団を敷き、戸を僅かにあけて読んだものである」と、鏑木悠紀夫（本科22期）は述べている。また当時は、「夏は蚊に悩まされ、冬は寒さにおびやかされ、毎日毎日無類の空腹感にさいなまれながらの生活であつた。食糧の不足は深刻で…その頃、中沢先生からカボチャの花のご馳走にあずかった記憶は今もなお鮮かである」と、草野成虎（本科23期）は述べている。「燃料が何もなく、悪いこととは知りながら天井板をバリバリはがして焚く始末。そのうち各部屋でもならいはじめたので、ついに全寮の天井板が一枚もなくなつてしまった。…図書館とは名ばかりの部屋の暗い電灯の下で中沢先生が、寮内の一室では藤村先生が情熱をたぎらせつつ読書に耽っておられる学究的態度には胸をうたれ

るものがあった」と、今村元（本科22期）は吐露している。また「電気なども極端に使用を制限されていたので、夜は早くから都下全域に停電が続き、読書に飢えていた寮生は京成青砥駅の待合室まで行って終電車が通過して駅の灯が消されるまで、寒風に骨まで凍る思いをしながら読みふけた」と、高津明児（本科23期）は証言している。そして、彼らなりの日常生活での愉しみは、「月夜には中川べりを同志と共に散



資料1 1947年度の大東文化学院専門学校生徒募集要項（仲新講師旧蔵）



資料2 志道寮前にて¹⁵



資料3 青砥校舎を背に（1949年）¹⁶

策して、逍遙歌や寮歌を高唱したり、同僚の吹く尺八の音に耳を傾けながら望郷の念に駆られたり」することであったという。

母校の半世紀（7） 昇格へ一丸の努力 自立自存の悲願実る

（1974年10月1日、第261号1面）

同上記事では、敗戦後本学は「建学精神の基盤を奪われただけでなく、国庫、政界からの援助をも絶たれるという逆境に遭遇した。この苦境から自立自存の方途を講じなければならなくなった」とし、理事時枝満康（高等科5期）は新制大学への昇格の障害として、「（一）大東の校名が悪い、（二）校舎の環境が好ましくない、（三）図書館設備がない、の三点であった。『大東』の校名は大東亜戦争[ママ]、大東亜共栄圏などにつながり、軍国主義に結びつくものである。青砥の校舎はもともと工場の少年訓練工養成所と寄宿舎であり、しかも中川堤防下であり、立地条件も環境も良好でないのは当然である。また図書館は昇格に備えて学生から一人千五百円の寄附金を集めて基金に充当し、校舎隣接の地を借入れて建設に着手したのであるが、たまたまカサリン台風の襲来（昭22・9）により倒壊してしまった」と挙げ、その結果、1949（昭和24）年2月の第1回昇格審査では不認可となっている。学院関係者らの協議では、たとえば「鶴沢総明先生（当時明大総長）も会議に列席され、明治大学に合併したらどうかとの案も出るなど検討したが、本学同窓としては「専門学校としての存続は制度上不可能であり、もし昇格できなければ廃校以外に方法はない、かといって他大学への合併も忍びがたい」とし、校名を「東京文政大学」と改めて、校舎の環境も旧池袋の地に復帰し、図書館設備等も整えることを条件に掲げ、文部省の大学設置委員会に再審査方を極力懇請していく。そして1949（昭和24）年4月、東京文政大学の設置が認可される。「東京文政大学学則」の第1章第1条「大学の目的及び使命」として、「本大学は、東方文化の伝統を生かして、文政諸学を講究し、以て世界文化の進展に寄与することを目的とする。

本大学は、その目的を達成するために、文政諸学について、その智識の涵養と人格の向上に力を注ぎ、以て人類の平和と社会の幸福に貢献し得る人物を養成することを使命とする」と明記されたのである。

本学の校名は、1951（昭和26）年2月に「東京文政大学」から「文政大学」と改称する。さらに1953（昭和28）年4月には、同窓諸氏にとっても馴染み深い「大東文化」を冠した「大東文化大学」と改称されたのである。『大東文化大学五十年史』には、この時に「大東文化学院大学」か「大東文化大学」かの選択肢が議論されたとする。さらに、苦慮した藤村通助教授（本科15期）が、卒業証書名を含んだ校名改称の問題について、同窓の先輩である清田清（本科1期）に相談をはかったという¹⁷。清田によれば、「私[清田]は藤村氏の依頼を受けて当時実力第一人者であった佐成謙太郎氏（教授・理事であり、また土屋学長とは義兄弟の間柄）の自宅を訪問した。極力懇請したのである…私は、この件は同窓生全員の要望であると強くお願いしたため、同氏も遂に『同窓全員の総意であるならば、尊重しないわけにはいかない。今まで誰もあなたのようになぜ主張してくれなかったのか』と大変意を動かされ、『…そこで同窓の意見を強調して決めてもらいたい』と言われ、私の要望をきき入れて下さった」と、校名改称に至る裏事情を証言している¹⁸。

母校の半世紀（8） OB、再建に協力 土屋学長切々の訴え

（1974年12月15日、第263号1面）

母校の半世紀（9） 教学体制が整う 在校生も募集に協力

（1975年2月15日、第264号1面）

母校の半世紀（完） 板橋校舎へ移転 実を結ぶ振興計画

（1975年4月15日、第265号2面）

同上記事では、理事会の創立40周年記念振興計画（1960年4月発表）について、6ヶ年計画で、「（1）第1次計画として、池袋に教室兼講堂及び体育館を新設し施設面の充実を図る。（2）第2次計画として、学

部学科（文学部：日本文学科、中国文学科、経済学部：経済学科、経営学科、附属：高等学校、技術専門学校（弱電、土木）を増設する。（3）第3次計画として、学部学科の再増設（3学部6学科、文学部：日本文学科、中国文学科、経済学部：経済学科、経営学科、工学部：電気通信学科、土木工学科、大学院：東洋学術専攻）と校地の購入（池袋の現有地以外に、広大な土地を購入して、以上の諸計画を実施する）」を示している。これは、本学の運営思考が文政学部という単科の少数精鋭主義から、多角的な精鋭主義へと拡張したことを意味するのであろう。その実施状況については、「（1）東京板橋区志村西台町に7200坪の土地を購入し、1960（昭和35）年11月校舎の新築に着手する。その第1期工事1350坪は、翌1961年8月には完成する。（2）大学の教学部門の整備充実として、池袋校舎から板橋校舎への移転にともない、同年9月文学部と経済学部の分離増設が申請される。翌1962年1月に認可となり、同年4月から文学部の日本文学科・中国文学科、経済学部経済学科が開設される。（3）附属高等学校として、1961年8月男子普通高校である大東文化大学第一高等学校が認可され、翌1962年4月開校される。さらに、1954年に設立された大東文化研究所の内容や組織等の整備充実をはかり、1961年4月大東文化大学東洋研究所と改称される」などとする。とくに、平島敏夫東洋研究所長（学長）によれば、最高学府としての大学において学問の専門分化が過度に進んでおり、横断的な共同研究の場が絶対的に不足しているなかで、東洋に関する総合的共同研究センターと位置付けられる本学の附置研究所として、大学の本来使命である研究機関としての学術の最高水準を追求していきたいと熱い期待を示している。

実は、『大東文化大学七十年史』（1993年）では、「後援会の設立と職員の努力」という項目で、「以上のような構想を実施させるためには、まず資金の獲得が先決問題であり、このためには政財界の有力者に呼びかけて、学校法人大東文化学園の外郭として後援会を組織し、建設資金

の調達をはかることが急務であるとし、異常な熱意と努力とにより一九六一年七月、ついに成立された」などと簡潔明記している¹⁹。『大東文化大学五十年史』（1973年）が、「後援会の設立」という項目で（1）大東文化大学創立四十周年記念事業趣意、（2）記念事業の目標、（3）大学創立四十周年記念事業建設資金募集要項、（4）後援会趣意書、（5）後援会成立の経過、という20頁以上をさいて、その詳細を記しているのとは対照的である²⁰。政界引退後に大東文化大学の後援会長を務めた岸信介は、1961年7月の後援会発会式で、「なんとかわれわれ後進のものがひとつ大東文化大学建設の趣旨を十分に到達するようにお力ぞえもし、またご協力申しあげるといことは、われわれの責任であり、また現在の情勢、あるいは将来の日本の発展を考えてみるといとうと、この大東文化大学の内容を充実し、その本来の目的を十分に達成せしめるようにすることが必要であるということを感じたしまして、微力ではありますが大東文化大学の後援会の会長を引受け、同志である南条[徳男]君に大学の理事長を引受けてもらいまして、相共に協力して、各方面の同憂の士にお願いをして皆様のご協力とご支援のもとにこの大学の内容を充実し大学本来の目的を達するために後援をいたしたい」と、その意気込みを述べている²¹。「大東文化大学創立四十周年記念事業建設資金募集要項」をみると、募金額は3億円、募金の種類は寄附金（普通寄附金：1口5万円（2口以上、分割も可）、特別寄附金：口数によらない寄附金）と学債：1口1万円（なるべく2口以上）3年据置き、とされている。募金目標額3億円達成を目指して、たとえば1961年11～12月の岸会長の募金活動の一例は、11月22日に南条理事長と共に八幡製鉄、富士製鉄、日本鋼管の各社長らと会談し、12月15日には日本鉄鋼連盟常務懇談会に赴き、募金の趣旨説明と協力懇請をしている。同上の大学新聞記事では、「窮乏期にあった当時の大東にとっては、無から有を生ずるに近い夢の如き大構想であったともいえる。しかし大発展を期するためには断乎として



資料4 大東文化大学後援会趣意書²²

推進実行しなければならなかった。その第一段階である板橋移転、学部増設に当っては幾多の困難が生じ、とくに校舎建築に際しては資金面の困難を生じて膠着状態に陥ったのであるが、あらゆる障害を排除して今日隆盛の基盤を確立した」と結んでいる。

 おわりに

このように、大学新聞『大東文化』に連載された囲み記事「母校の半世紀」第1部・第2部（1972～1975年）をみると、創立50周年までの本学の歴史を紐解くうえで貴重な資料とよく分かるだろう。たとえば、1938年の第三部東亜政経科の設置などに関して、当時を振り返っている藤村通（本科15期卒）の証言などは、我われがこれから本学の百年史編纂を進めていくうえで重要な手がかりを示していると痛感する。本科の東亜政経科の他に、本学に興亜専修科（1944年）が設けられていたことなどが示唆されており、従前の『大東文化大学五十年史』や『大東文化大学七十年史』などでもほとんど言及されていない点である。それは目から鱗といえようが、このような貴重な示唆などを踏まえて従前の大学史で十分に明らかにされていない点などのより重点的な調査研究もやはり必要であると思われる。

-
- ¹ 「50周年を祝う 全学を挙げて誓いを新たに 見えない面に努力」『大東文化』1973年11月1日、第253号1面。
 - ² 第1部「母校の半世紀（1）」『大東文化』1972年2月1日、第236号1面。
 - ³ 第2部「母校の半世紀（1）」『大東文化』1974年2月1日、第255号1面。
 - ⁴ 「五十年史あとがき」『大東文化』1974年2月1日、第255号3面。
 - ⁵ 「私の当時の思ひ出」『東文』第1号（1941年12月）、10～17頁。
 - ⁶ 「恩師 影山誠一教授を偲ぶ」『大東文化大学東洋研究所所報』第58号（2012年12月）、1頁。
 - ⁷ 「往時茫として夢の如し」『内堀維文遺稿並伝』（1935年）1069～1074頁。
 - ⁸ 『朝日新聞』（東京朝刊）1944年4月5日、3面。
 - ⁹ 『朝日新聞』（東京朝刊）1945年1月6日、2面。
 - ¹⁰ 『大東文化大学五十年史』（1973年）356頁。
 - ¹¹ 『大東文化大学五十年史』384～385頁。
 - ¹² 『大東文化大学五十年史』383頁。
 - ¹³ 「校務員ぐらしの二十六年 磯ヶ谷夫妻の思い出話」『大東文化』1973年11月1日、第253号2面。
 - ¹⁴ 『大東文化大学五十年史』381～385頁。
 - ¹⁵ 『大東文化大学創立60周年記念 軌跡』（1983年）32頁。
 - ¹⁶ 『大東文化大学五十年史』394頁。
 - ¹⁷ 『大東文化大学五十年史』454～456頁。
 - ¹⁸ 清田清『二人で歩いた五十年』（1976年）26～27頁。
 - ¹⁹ 『大東文化大学七十年史』（1993年）70頁。
 - ²⁰ 『大東文化大学五十年史』546～566頁。
 - ²¹ 「大東文化大学後援会発会式速記」『大東文化大学五十年史』558頁。
 - ²² 『大東文化大学後援会報』第1号（1963年）、24～25頁。

“Half a Century of our Alma Mater” – A Series of Articles from the University Newspaper “Daito Bunka” (1972 ~ 1975) –

Muneo Tanimoto

From February 1972 to April 1975, “Daito Bunka”, a university newspaper of Daito Bunka University, published a series of articles called “A Half Century of our Alma Mater”, which can be divided into two parts. While the first sixteen contributions to the series, published until October 1973, were interviews with Daito alumni, those contributions published between February 1974 and April 1975 were summaries from “Daito Bunka University Fifty Year History”, published in commemoration of the 50th anniversary of the establishment of the university.

This series of articles offers valuable material to unravel the history of our university.

Especially in the early interview articles (oral history), many points are covered that were hardly mentioned in the official University histories “Daito Bunka University 50 Years History” or “Daito Bunka University 70 Years History”. Based on these newly unearthed facts, it looks as if more investigations are necessary to get a more detailed picture of Daito Bunka University’s first 100 years of existence.